

笹川保健財団 指定研究

(西暦) 2022年3月25日

公益財団法人 笹川保健財団
会長 喜多悦子 殿

2019年度指定研究

研究報告書

標記について、下記の通り研究報告書を添付し提出いたします。

記

研究課題 在宅看護センターによる社会的処方に関する実施報告書

所属機関・職名 公立学校共済組合九州中央病院総合外科部長・緩和ケアチームリーダー

氏 名 武末 文雄

■はじめに

社会的処方 (social prescription) とは、病気やけがをして、医師を受診すると処方箋が出されるように、社会とつながる機会を処方する (紹介する) こととされる。すなわち、薬剤の処方ではなく、課題をもった患者の人間関係などを鑑みて、生じている課題を解決するために、当該地域の多様な社会活動なサービスに参画する「機会」を「処方」し、患者が社会的に孤立することを防ぐとともに、地域の各種資源を活用することで、個人の生きがいや社会活動を活性化し、身体的・精神的・社会的健康と well-being を向上させ、ひいては地域の活性化を目指している。

最初にこの制度を導入したのはイギリスで、2016年に全国的なネットワークが構築された。が、現在、全国的に完全に根付いているわけでないが、既に仕組みが稼働していることは事実である。具体的には、ある患者が、家庭医など保健医療専門職者から何らかの支援を必要としていると診断された場合、リンクワーカーと呼ばれる人材が当該地域の適切な地域活動に橋渡しする仕組みである。各種のボランティア活動や共通の趣味を持った人々の集団やコミュニティ、また、支援付き就労といった地域の資源を「処方」し、個人の健康の回復と地域の活性化に貢献することを目指している。また、適した活動が見つからない場合には、リンクワーカーと患者が共同で、新たな活動を創出することもあるという。

わが国でも、何人かの研究者や実践家が社会的処方の実施にとりくみ、また、日本医師会をはじめ厚生労働省などの働きかけで、2020年7月の骨太方針 (経済財政運営と改革の基本方針) にモデル事業の実施方針が盛り込まれ、社会保障審議会 (厚生労働相の諮問機関) では介護報酬への反映も視野に入れた議論が展開されているが、幸か不幸か、相前後するコロナ禍によって、大きく発展していない。

笹川保健財団が行った8カ月の「日本財団在宅看護センター起業家育成研修」を受講した後、全国各地で開業している在宅看護センターは、「適切なフィジカルアセスメントを用いた全人的ケアを通じ、地域の人々の健康を看・護り、地域包括ケアのハブ的存在を担うこと」を目的としており、日々の訪問活動を通して、地域の課題やニーズを把握することができる。既にいくつかのセンターではそれらの課題に対して社会的処方的活動も展開し始めている。

今回、それら地域の状況と関与する人々の健康状態を把握している看護師による社会的処方的トライアルとして、2件を試みた。

訪問看護師による食にかかわる社会的処方的活動

会社人間が多い日本の男性は、退職後、社会的に孤立しやすいといわれる。今回は、それら高齢男性を対象とした「男の料理教室」と、昨今、様々な状況から社会、学校、家庭から孤立する子どもたちを対象として、いわゆるこども食堂ではなく、子どもたちがお弁当を作り、食に困っている高齢者世帯や、安否確認が必要な孤立世帯に配布する「子どもの居場所を利用した炊き出し」を実施したので、その実態と多少の影響を報告する。

■ 男の料理教室

開催場所: フレッシュワークかわら(〒822-1403 福岡県田川郡香春町高野 987-1)

県開催日: 2021年12月5日(日)15:00~19:00

開催者: 特定非営利活動法人むゆうげん

管理者: 原享子(「日本財団在宅
看護センター」起業家育成1期修了生)

参加者: 8名(65~85歳男性)



目的: 社会的に孤立しやすいといわれる
高齢男性を対象に料理教室を開催
することで、それまで調理に関心w
持っていなかったであろう男性たち
が、調理法を学ぶと同時に地域交
流を図ることを目指す。
また、調理時間を利用して、認知
症に関する講座を同時開催し、
認知症とその予防への理解を深
める。

活動内容:

① 料理教室(講師: 松嶋啓介先生)

シェフ松嶋氏は、福岡県出身で、高校卒業後、「エコール辻東京」で料理を学んだあと、東京の有名なフレンチレストラン『ヴァンセーヌ』勤務を経て、20歳から料理修業のために渡仏各地での修業を経て、2002年、25歳で南フランスのニースにフランス料理店『Kei's Passion』を開店した。同店は、新鮮な地元食材を活用した斬新な両市を提供すること有名となり、同レストランは2006年ミシュランガイド「一つ星」の評価を得ている。氏は、また、減塩に熱心なこと、子どもの発育に適正な食生活が重要なことを、漫画を通じて発信されている。



今回は、市在住のフランスのニースと Zoom を繋ぎ、塩を使わず素材そのものの味を味わう「鶏のクリーム煮」を作ることで、氏の料理哲学の解説を受けた。

② 特別講演(講師:たろうクリニック院長 内田直樹先生)

「認知症を防ぐではなく、認知症に備えるための心得」の Zoom 講演を実施

実施の経過:

実施した田川市は、福岡県のほぼ中央部に位置し、北九州市から南西に約 30km、県庁所在地の福岡市からは東北に約 50km で、旧豊前国に位置したこともあって、北九州都市圏に属する。この地域は、かつて日本の近代化を先導した炭鉱地であった。1900 年、三井田川鉱業所の開設後には、全国から仕事を求めて移住した人々が多かった。田川は、筑豊最大の炭都であり、戦後の 1950 年代には人口が 10 万人を突破していた。しかし、1960 年代以降、いわゆるエネルギー革命によって石炭に代わり石油がエネルギー源になるとともに、石炭産業は衰退の一途となった。1964 年、先の東京オリンピックの年に三井田川鉱業所が閉山しその後継企業も、1969 年に閉鎖、同時期、市内に残っていた小規模炭鉱も次々閉山し、1971 年にすべての田川市の炭鉱は閉山した。

田川市は、東は田川のシンボルでもある香春岳、西は船尾山、南に全国的にも有名な霊峰英彦山連邦が連なっている。石炭産業が消えた後、山々に囲まれた衰退した盆地の感は否めなかった。近年は、それら歴史とも関係するユネスコ歴史遺産山本作兵衛の絵なども活用し、また、IT 産業に力を入れるなど新たな開発を目指している。

開催者である特定非営利活動法人むゆうげんの理事たち(女性 2、男性 4 名は原享子の高校同級生)は皆、田川郡出身であり、炭鉱の町として栄えた田川郡が閉鉱後に人口減少をし、地域交流の機会や場が減っていることを痛感していた。特に、男性の社会的孤立が目立つようになりつつあることから、財団活動の一環として、今回のお料理教室開催を決定した。

開催は、地元の再興をいとされる若い香春町町会松本市のご尽力もあって、参加者募集には、興味をそられる広報用チラシを地元企業に作成依頼し、完成したチラシは新聞の折り込み広告やスーパーに掲載依頼するなど、精力的に活動されたことが功を奏した。残念ながら、コロナ 5 波の立ち上がり期に遭遇したため、当日は定員 8 名に限定せざるを得なかったが、香春町長の参加もあり、NHK 福岡放送局の取材も受けた。

料理教室へ参加した男性の中には、普段は全く調理をしない男性もいたが、Zoom を通じての松嶋シェフの指導の下、主催者特定非営利活動法人むゆうげんの理事長で元調理師、九州栄養福祉大学教員と学生 2 名のサポートもあり、和やかに滞りなく鶏のクリーム煮が完成した。当初は、一同で食

事しながらの懇親を予定したが、コロナの為、それも中止したが、和気あいあいであった。

なお、料理が進行する時間に合わせ、福岡市東区で、認知症を主体に、地域医療に貢献されている「すずらん会たろうクリニック」院長で、財団の研修でも講師も務められている内田直樹医師に、同じくZoomを通じて、認知症に関連する講義をお願いした。認知症に関する講演では、講演後に質問が複数出たが、関心の高さがうかがえた。

後日、料理教室参加者の妻から、料理をしたことのない夫が、料理教室以降、頻りに鶏のクリーム煮を作るようになったこと、食生活への関心がたかまったと喜びの手紙が届くなど、男性が料理教室へ参加することで、料理に対する興味が高まり、料理する頻度が増えることや料理を担当する配偶者への感謝、料理を通じての会話の増大する²⁾³⁾ことが報告されているが、本料理教室でも同様の反応が得られた。

■子どもの居場所を利用した炊き出し

開催日：①2022年2月6日(日)12:00～18:00 / ②2月27日(日)12:00～18:00

開催者：一般社団法人とみ会 金城里奈(「日本財団在宅看護センター」起業家育成7生修了生)

開催場所：沖縄県南城市市民会館

参加者：第1回 2022年1月30日。

子ども：10名(3～15歳)、

大人：12名

第2回 2022年2月26日

子ども：11名(3～15歳)、

大人：13名

目的：支援を受ける側に陥りやすい子供たちが、食に困っている世帯や、安否確認が必要な世帯にお弁当作り、届けることで、地域交流を深めると同時に、子供たちの自尊心を高める。



活動内容：

子供と支援者が一緒にだい1回目は、120食、第2回目は70食のお弁当を数時間かけて手作りし、できたてのお弁当を、近隣の食に困っている世帯や安否確認が必要な世帯に配布する。第2回目を見学した。

実施報告：

金城氏は、縄県南城市で、訪問看護事務所「ケアサイクルの駅 訪問看護レインボー」を運営する傍ら、子ども食堂を週に2回実施してきた。

この間、子どもたちが支援を受ける側に陥りやすく、自身が誰かの役に立てることを実感しないまま、支援を受け続けることに課題に抱き、子どもたちの自立と自尊心を涵養するために本活動を意図したという本会の開催に至った。



参加した子どもたちは、主に金城氏の行っている子ども食堂の常連の要で、幼児から中学生と年齢幅はあるものの、それぞれに与えられた役割を嬉々としてこなし、美味しそうなお弁当を作り上げた。

会場は、古い南城市の市民会館の調理室で、かつて整備された大型冷蔵庫などは、ほとんど故障しており、また、炊飯器も旧式で使用に絶えず、必要資機材は、すべて金城氏らの持ち込みであった。食材は、地産品で安価であるとのこと。



昼前、材料、資材持参の参加者が集まる。割烹着、キャップなどを身に着けたあと、急遽に応じて、材料を洗ったり切ったり、役割分担は整然とされていた。幼児であっても、例えば、卵を割る、混ぜる、玉子焼きに分注するなどを負担したり、コロッケの材料を混ぜたり、危険のない範囲で役割を分担させていたが、金城氏の子ども食堂の成果であるかと拝見した。

献立は、管理栄養士にアドバイスを受けた栄養バランスを考えたものを採用。普段は料理のお手伝いをしない子供たちが大半であったが、皆で作る楽しさを感じているようであった。

作ったお弁当は、事前に支援者がリストアップした食に困っている世帯や、安否確認が必要な世帯へ配布。配布先には、金城氏の訪問看護サービスを受けている高齢者も含まれており、子供たちは在宅で療養する高齢者を理解する機会にもなった。子供たちは配布先から「とても嬉しい。毎週やって

ほしい」「子ども達の方が料理が上手なんじゃない？」などの声掛けをもらい、自己肯定感を高める機会となった。



■ 考察

地域に根差した在宅看護センターは、地域住民との密接なかかわりから、最初の接触の機会となる健康問題を超えて、地域に潜在する、時には住民が認識していない課題をも把握している。しかも、それぞれが優れて個人的かつ個別の問題であることが多く、大げさな施策以前に、個人的あるいは狭い地域的関与で改善しうるものもある。その意味では、社会的処方 の最小限活用、つまり僅かな費用で実施できることで改善が可能であり、その結果として、地域の連帯から地域経済の活性にも繋がる実感がされている。政府がいう自助、互助、共助、公助の初期のステップともいえる。



単一民族からなる狭い日本であるが、他地域からの移住者が多い都市部での人間関係の希薄化と、過疎化により、従来の密な地域連携が希薄化しつつある地方でのコミュニティの問題は、違いがあるものの、要は、人間関係が確立し難いことにある。

孤立する人々がどうつながり、如何に地域社会を構築するか、その基本的な個々の人間のつながりを作る活動のきっかけが社会的処方でもある。

今回、年齢による分断を解消し、社会的孤立を防ぐことに、如何に地域の在宅/訪問看護師が貢献できるかの実際を見学できた。

日本財団在宅看護センターの1事務所が主催したことで、看護的視点が活動内に組み込まれており、栄養、身体活動、コミュニケーションなど、広い健康面が把握された活動となった。また、地域住民が、普段から医療と生活の両方に及ぶ職種と連携・協働を行う在宅看護師と顔の見える関係となり、繋がりを作ることができたのは、地域住民の健康不安の解消において、重要な意義である。今後も看護師が主体となった社会的処方活動を継続して行うことで、地域住民はコミュニティの繋がりと、健康に関する安心感を得ることができるが、現在、社会的処方に発生する費用は行政などの補助金に頼るしかないため、容易かつ安定した予算が確保できる仕組みが必要と考える。

■ 二つの料理関連活動から考える社会的処方のあり方と「健康の社会的要因」

今回の福岡県田川郡における高齢男性の料理教室も、沖縄県南城市の子どもによるお弁当配布も、いわゆる社会的処方の範疇に収まるものとは思えないが、地域の人々の「健康」改善に資する看護師のユニークな活動とみなすことができる。

イギリスで生まれた社会的処方の考えの基底には「健康の社会的決定要因 (social determinants of health SDH)」を全うするがあるとされているので、多少の考察を行う。

SDH とは、1986 年、WHO (世界保健機関) がカナダで開催したオタワ会議で提唱し、2005 年のバンコク憲章で再提唱した新しい健康観に基づく 21 世紀の健康戦略で、「人々が自らの健康とその決定要因をコントロールし、改善することができるようにするプロセス」と定義されている。

この考えは、18 世紀以降に生じたイギリスその他の、当時の先進工業化国における死亡率の低下と人口増加の原因について、独自の研究を行ってきたイギリスの医学歴史家トマス・マッキューン (Thomas McKeown 1912-1988) の考えに源を発する。マッキューンは、「社会医学」の概念を提唱し、『医学の役割』、『疾病の起源』などの著書を通じ、治療一辺倒の医学だけが人々の健康を護っている訳でないことを示そうとした。すなわち、彼は、死亡率低下における公衆衛生(社会医学)の役割、特に 19 世紀後半の公衆衛生の改革と栄養改善こそが、人々の健康維持、改善に資するもので、すなわち、これらが健康を規定する社会的決定要因であることを示唆した。

この考えは、後に有名なラロンド報告を発表したカナダの厚生大臣マルク・ラロンドやアメリカのヘルシーピープルの考え、1980 年に発表された現英国保健省からのブラック・レポートのまとめの議長をつとめたサー・ダグラス・ブラックの健康格差や社会格差の指摘、そして 1986 年の「健康づくりのためのオタワ宣言」における健康の前提条件、さらに健康の支援環境に関するスツバル声明などに影響を与えている。

1997 年、健康づくりの 21 世紀へのジャカルタ宣言でも、健康の決定要因の重要性が強調されたが、

次いで、1998年、イギリスのマイケル・マーモット(後の世界医師会長)やリチャード・ウィルキンソンによって、より正確な**健康と社会**を結びつける現実的かつ政策的な概念となった。

「すべての人びとが、あらゆる生活舞台—労働・学習・余暇そして愛の場—で健康を享受することのできる公正な社会の創造」こそ、健康づくりの戦略目標となるとされてきたが、1986年のオタワ会議当時、昨今の地域コミュニティの衰退や、90年代に頻発した地域紛争と巨大自然災害、さらに21世紀初頭から続く、SARS、インフルエンザ、MARS、新型コロナなど新たな感染症の流行、パンデミックなどによって、社会的に孤立している弱者への測りがたい負の効果とともに、さらにそれらが孤立を促進し、社会を脆弱化する。

判りやすい健康面を見ても、社会的孤立が喫煙、飲酒、偏在する食生活、引きこもりなどから高血圧、肥満、フレイルや認知症を悪化せ、健康寿命に影響することが指摘されている。

薬にかわり、社会的「つながり」を処方することで、個人が人間関係を回復し、社会活動に参画する機会を得ることは個人レベルでも地域レベルでも望ましい活動である。さらに、それを地域住民とつながりをもつ看護師が先導するならば、地域と個人の健康維持、改善に極めて有意義と考えられる。

■参考文献

- 1) Social Prescription NHS.
[https://www.england.nhs.uk/personalisedcare/social-prescribing/#:~:text=Social%20prescribing%20is%20a%20way,for%20practical%20and%20emotional%20support.Julianne Holt-Lunstad, Timothy B. Smith, J. Bradley Layton \(2010\). Social Relationships and Mortality Risk: A Meta-analytic Review. PLOS Medicine, https://doi.org/10.1371/journal.pmed.1000316](https://www.england.nhs.uk/personalisedcare/social-prescribing/#:~:text=Social%20prescribing%20is%20a%20way,for%20practical%20and%20emotional%20support.Julianne%20Holt-Lunstad,%20Timothy%20B.%20Smit%20h,%20J.%20Bradley%20Layton%20(2010).%20Social%20Relationships%20and%20Mortality%20Risk:%20A%20Meta-analytic%20Review.%20PLOS%20Medicine,%20https://doi.org/10.1371/journal.pmed.1000316)
- 2) 松尾美紀子. 男性のための調理入門講座の評価. 実践女子短大評論. 2000;21:68-71.
- 3) 榎本迪子, 若本ゆかり, 佐藤由美子, 他. 公開講座「男性料理教室を開催して」—地域交流活動実施報告—. 下関短期大学紀要. 2004;27:11-20.
- 4) World Health Organization. [The Ottawa Charter for Health Promotion](https://www.euro.who.int/data/assets/pdf_file/0004/129532/Ottawa_Charter.pdf). Adopted on 21 November 1986. chrome-extension://efaidnbmnnnibpcajpcgiclfndmkaj/viewer.html?pdfurl=https%3A%2F%2Fwww.euro.who.int%2Fdata%2Fassets%2Fpdf_file%2F0004%2F129532%2FOttawa_Charter.pdf
- 5) Michael Marmot The Health Gap. The Challenge of an Unequal World. Bloomsbury, 2015
- 6) 酒井シヅ、田中靖夫共訳『病気の起源—貧しさ病と豊かさ病—トーマス・マツキーン』朝倉書店
- 7) [Full text of the Lalonde report at Health Canada](https://www.euro.who.int/data/assets/pdf_file/0004/129532/Ottawa_Charter.pdf)
chrome-extension://efaidnbmnnnibpcajpcgiclfndmkaj/viewer.html?pdfurl=http%3A%2F
- 8) 西智弘編著 『社会的処方』 学芸出版社 2020
- 9) 三原護 骨太方針に盛り込まれた「社会的処方」の是非を問う 薬の代わりに社会資源を紹介する手法の制度化を巡って ニッセイ基礎研レポート 1-13, 2020-11-30 最後に、「男の料理教室」では、現地での活動に協力下さった福岡県田川郡香春町町長香春町長鶴我繁和氏、町会議員山下

剛氏ほか、参加下さった町の方々、講師をつとめられた松嶋啓介シェフ、認知症を解説下さったたろうクリニック院長内田直樹医師と、半年以上の準備期間から協力頂いた日本財団在宅看護センターネットワーク「わこの家」ご一同と当日の指導他ご協力頂いた九州栄養福祉大学教員の方々に深謝します。

また、沖縄県南城市の「子どもの居場所を利用した炊き出し」では、市民会館の使用をお許し下さった南城市および福祉課の方々、当日参加下さった日本財団在宅看護センターネットワーク「一般社団法人とみ会」管理者金城里奈氏とそのスタッフ、およびそのお弁当の会に参加されてきた市民の方々に深謝します。

さらに、この機会を与えられた公益財団法人笹川保健財団に、心から感謝し、日本の地域において、公正な保健医療サービスの普遍化における看護師の活動への支援に敬意を表します。

以上